

教祖様のお告げ — M・マクルーハン『人間拡張の原理』—

「メディアはメッセージだ」。1960年代マクルーハンは一世風靡。出版史・映画史といった個別メディア研究は盛んで、印刷・電気通信をはじめ科学技術史には名著が少なくない。
これに対してメディアを横断的に論じたマクルーハン著作は新しい流れを作り、一大旋風を巻き起こした。(菊地実)

嵐の去った後で

マクルーハnbムは一過性の台風・竜巻だったのだろうか。米ほどではないにしろ、日本でも折からの情報社会論やシンクタンクブームの中で、竹村健一『マクルーハン入門』(講談社・1967年8月)がヒット。その後、竹村健一さん自身もテレビ界の寵児となった。

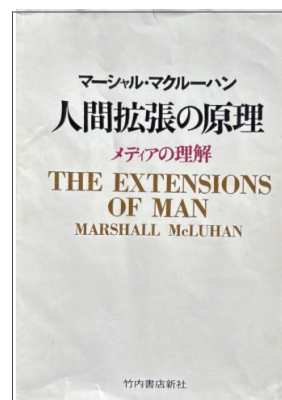
今回取り上げる『人間拡張の原理』はマクルーハン主著。1967年11月刊行・1978年10刷と、お堅い学術書にしては稀に見る重版を重ねた。発行元竹内書店新社は当時マクルーハン本で知られ、私も出版社時代に文京区関口の同社を訪問した。マクルーハン著作は『機械の花嫁』(1951年)『ゲーテンベルグの銀河系』(1962年)だが、日本における翻訳紹介は逆で、本書が初紹介。

メディア文明論

本書に三度チャレンジ。学生、メディア講義、そして今回である。

最初は内容がよく分からなかった。ただクール／ホット*1という言葉は始終耳にした。「クールな踊り、ホットな映画…」ここでも再三引用されているルイス・マンズフィールドと並ぶ壮大な文明論ではないかと感じた。

二度目は大学講義に使おうと考えたものの、あまりにもドグマ色が強く諦めた。独断と飛躍が多く、記述にファクトが少ない。しかし「貨幣」「時計」や「交通」がメディアに含まれている事は、改めて達見だと思った。古代帝国は道路が、経済発展史は貨幣が、近代は時計が制している。今だから正直に告白するが、電通『情報メディア白



＜竹内書店新社＞

書』(1991年テスト版)はこの本の構成を参考にした。

今回、半分アルツ頭で一週間もかかって読んだ感想は

①古色蒼然たる項目と時代背景

懐かしい名前が多数出てくる＝「RCA会長デビッド・サーノフは…メディアの本性に全く認識を欠いている…ロバート・シーボルト、W・W・ロストウ、J・K・ガルブレイスなどの経済学者は古典経済学では説明できない…」(19頁)、ここではラジオ・テレビ放送の父と言われているサーノフもかたなしである。「アーノルド・トインビーは、歴史を書いているがメディアの理解に欠けているが…事例に満ちている」(28頁)。逆に仏二月革命で活躍したアレクシ・ド・トクヴィルは「活字と印刷の文法を最初にマスターした人物である…印刷文化の価値や既成概念に全くとらわれない」(22頁・24頁)と高評価。

②神話や文学・芸術引用が目立つ

メディア論というより文明論もしくは文学芸術論＝「人間の労働を機械が変わるようになって…ラスキン

やモリスなどの金持ちは、審美的な理由から、人夫のように労働した」(55頁要約)

③電気とオートメーションを特筆

情報理論やサイバネティックスには触れていない。「インチキとは、友人でもない人を友人だと間違えて電話で話す」(340頁)は電話の章冒頭だが、現在のSNSをマクルーハンはどう論じたであろうか？

おそらく現在の社会学系メディア研究者が読んだら英詩人や文学者引用が多く美術にも触れるので、ひどく難解>に思えるかもしれない。もともとマクルーハンは英文学者で、ジョイス大好き人間。本書訳者も英文学系の後藤和彦先生(NHK/常磐大)と高儀進さん(早大)である。

素晴らしきコピー

本書は理論編一部と、個別メディア26の二部で構成されている<図表>。衣服や家、車輪、時計と「メディアが一般のものより広い」と訳者はわざわざことわりを入れている。本書はペーパーブックになるほどのベストセラー。どれもタイトル(表題)が出色で、コピーライターとしての抜群の才能が感じられる。本は中身よりタイトルだと先輩編集者に教わったが、その通りかもしれない。ちなみに「衣服／拡張された皮膚」「写真／壁なき娼婦宿」「新聞／ニュース漏洩による政治」とサブタイトルも刺激的クールだぜ！

『メディア＝人間拡張の原理』は「タイプライター」が入ってるにも関わらず、人間感覚をマクロ・ミクロに拡大し世界観を一変させた望遠鏡や顕微鏡に触れていない。道、車輪から自動車・飛行機と交通に目を配っているのに、十九世紀を代表する鉄道や運河も無視。これは全くの憶測だが、トロント大学同僚で影響を受けた経済史家ハロルド・イニスが運河や鉄道専門家だったからかもしれない(『メディアの文明史』新曜社)。

<図表>本書二部の目次(26項目)

8. 話されることば	21. 新聞
9. 書かれたことば	22. 自動車
10. 道路と紙のルート	23. 広告
11. 数	24. ゲーム
12. 衣服	25. 電信
13. 家屋	26. タイプライター
14. 貨幣	27. 電話
15. 時計	28. 蓄音機
16. 印刷	29. 映画
17. マンガ	30. ラジオ
18. 印刷されたことば	31. テレビ
19. 車両、自転車、飛行機	32. 武器
20. 写真	33. オートメーション

(本書より)

マクルーハンは「書かれた言葉」特に表音文字としてのアルファベットを重要視し、さらに60年代進んだコンピュータによるシェークスピア解析にも関心が高い。

変幻自在なレトリック

教祖様だけに、本書と同じ年に発行された『マクルーハン入門』*2の中にある、一緒に研究雑誌を発行していた人類学者J・M・カルキンによる「マクルーハン理論とは何か」という文が分かりやすい。

ラジオ・テレビをはじめ電気・電子時代のコミュニケーションメディアは、人・コミュニケーション・世相を大きく変化させている。

マクルーハンをウディ・アレン映画で観たことがある。映画館の前で得意そうにマクルーハンを語っているキザなインテリ氏に向かって、「全部間違っている」と本人が否定する。

そういえば訳者の後藤和彦先生とD・J・ブーアスティン(シカゴ大学教授・アメリカ議会図書館長)著作の話はしたことはあるが、教祖様については語ったことがない。

*1:本書では、「ホットメディア／コールドメディア」と記されている。

*2:1967年サイマル出版会から刊行、M・マクルーハンとE・カーペンター編著／大前正臣・後藤和彦共訳。後に『マクルーハン理論』と改題し、平凡社ライブラリーから刊行。

■筆者/ ハーバート・マーシャル・マクルーハン(1911-1980年)、1936年カナダ・マニトバ大学大学院修士課程修了・ケンブリッジ大学留学。1946年トロント大学教授、英文学以外に独自のコミュニケーション論を展開。

■訳者/ 後藤 和彦、高儀 進

■書誌/ 竹内書店新社、1967年11月発行。四六判・468頁。